

「消化器内視鏡治療」

編集 長尾 房大 東京慈恵会医科大学教授

大阪医科大学教授 大 柴 三 郎

消化管内視鏡の歴史は長く、また内視鏡下の治療に関しても直腸鏡到達部位の有茎性ポリプ切除や食道静脈瘤の sklerosing therapy の検討も古い。しかし、実際には内視鏡下の治療が満足する評価を得られて以来十数年にすぎず、fiberscope が消化管疾患の診断に不可欠の位置を確立してからである。

近代内視鏡学が臨床診断に関し確固たる位置を占めたとき、既に先達が次の step として内視鏡下の治療に目を向けてきたことは当然のことと思われる。そして最も手近にあったものは直視下での薬剤注入法であり、難治性潰瘍の局注療法、手術を避けた上部消化管癌に対する抗癌剤の注入療法であった。

本格的内視鏡下の治療は常岡による胃の有茎性ポリプの切除術であった。本法は更に高周波メスを用いることにより、より安全に、確実に実施され、その適応は拡大し、今日では大腸腺腫、腺腫内癌の完全治療法として広く行われ、確立した治療法となっている。これらを中心とした応用治療法は更に拡大され、各種の開発と方法論が展開されている。

次の時期は ERC を応用した十二

指腸乳頭切開術の開発であろう。本法を基礎として胆道結石の非外科的摘出が行われ、進んで胆道狭窄の拡大法や内瘻の造成、更には膵石の治療にまで発展しつつある。

しかし、何と内視鏡治療法の新しいトピックスはレーザー光とのドッキングである。現在治療面では消化管出血に対する止血法と癌治療への応用である。消化管出血に対する止血法は出血源の探索と同時に止血をするための電気メス法、各種薬剤の局注法、その他多くの工夫が行われているが、レーザー止血は確実な止血法としての評価は高い。

内視鏡下の治療についての論文は枚挙にいとまがない。しかし、これらすべてを網羅した成書は現在見当たらない。

今回「消化器内視鏡治療」なる成書が長尾教授の編集のもとに発刊されたことは誠に時宜を得たものと言えよう。

冒頭に消化器内視鏡学の将来への期待・展望が日本における斯道の先達である崎田・芦沢・竹本教授らによって述べられているが、歴史の懐古ではなく、今後の発展への活を入れる言葉があり、この学問に研鑽を積む研究者への声援であろう。

さて、本書を短時間に通読した印象を簡単に述べてみよう。まず総論において主として電気メスとレーザーの基本的概念が記され、いつ偶発症に遭遇するか不測の施術に対し、熟知していなければならない基礎的知識が詳しく述べられている。

続いて各論において今日まで行われてきた内視鏡下の治療法のすべてが網羅されており、執筆者はすべて豊富な経験とその成績について記載し、殊に実施に当たっての詳しい方法論と注意事項が述べられていることは特徴的であり、今後新しく臨床に応用しようとする内視鏡医には極めて親切な内容が盛り込まれている。

しかし、一方各執筆者が述べている内容に重複する点、各執筆者がややもすると自らの方法を強調しすぎる嫌いがなきにしもあらずで、読者はその選択に困惑を感じる憾みがあるように思われる。この点に関しては新しい分野についての研究であるので、将来の取捨選択は今後の検討に委ねられるべきものであろう。

このように多少の難点はあるものの、内視鏡治療の進歩に関する執筆者の絶ゆまざる努力が紙面に溢れ、今後この領域に取り組んでゆこうとする若い医師や未経験者にとっては必読の書と思われる。

最後に誤植のみられなかったことは編集者の絶大の努力と評価したい。

380 頁 1983 年 ￥28,000

朝倉書店 刊